故郷（7）

（閏土と再会した数日後、「私」たちは故郷から旅立ちました。）

船はひたすら前進した。両岸の緑の山々は、たそがれのなかでうす墨色に変り、つぎつぎと船尾に消えた。

私といっしょに窓辺にもたれて、暮れてゆく外の景色を眺めていた宏児が、ふと問いかけた。

「おじさん、ぼくたち、いつ帰って来るの？」

「帰って来る？ どうしてまた、行きもしないうちに、帰るなんて考えたんだい？」

「だって、水生がぼくに、家へ遊びに来いって」

大きな黒い眼を見はって、かれはじっと考えこんでいた。

私も、私の母も、はっと胸をつかれた。（中略）

古い家はますます遠くなり、故郷の山や水もますます遠くなる。だが名残り惜しい気はしない。自分のまわりに眼に見えぬ高い壁があって、そのなかに自分だけ取り残されたように、気がめいるだけである。西瓜畑の銀の首輪の小英雄のおもかげは、もとは鮮明このうえなかったのが、今では急にぼんやりしてしまった。これもたまらなく悲しい。

母と宏児とは寝入った。

私も横になって、船の底に水のぶつかる音をききながら、いま自分は、自分の道を歩いているとわかった。思えば私と閏土との距離はまったく遠くなったが、若い世代はいまでも心がかよい合い、げんに宏児は水生のことを慕っている。せめてかれらだけは、私とちがって、たがいに隔絶することのないように……とはいっても、かれらがひとつ心でいたいがために、私のように、むだの積みかさねで魂をすりへらす生活を共にすることは願わない。また閏土のように、打ちひしがれて心が麻痺する生活を共にすることも願わない。また他の人のように、やけをおこして野放図に走る生活を共にすることも願わない。希望をいえば、かれらは新しい生活をもたなくてはならない。①私たちの経験しなかった新しい生活を。

希望という考えがうかんだので、②私はどきっとした。たしか閏土が香炉と燭台を所望したとき、私は相変らずの偶像崇拝だな、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかにかれのことを笑ったものだが、いま私のいう希望も、やはり手製の偶像に過ぎぬのではないか。ただかれの望むものはすぐ手に入り、私の望むものは手に入りにくいだけだ。

まどろみかけた私の眼に、海辺の広い緑の砂地がうかんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月がかかっている。思うに希望とは、③もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房 所収「故郷」による。一部表記を変えた箇所がある）

時代背景

『故郷』では古い時代の風習が象徴的に登場し、語り手の「私」を通して社会に対する批判や新しい時代への希望が訴えられている。ここには、作品が発表された当時の社会に対する魯迅の思いが反映されている。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「私たちの経験しなかった新しい生活」とあるが、これに対して、「私」の世代が経験した生活を、本文中から十五字以上二十字以内で三つ探し、それぞれ最初の三字を答えなさい。

(2) ――線②「私はどきっとした」とあるが、「私」は何に気付いてこのように感じたのか。適当なものを選びなさい。〔　〕

ア 私が思う希望というものは、地上の道のようなものではないかということ。

イ 閏土が香炉と燭台で偶像崇拝をするのを、心の中でひそかに笑っていたこと。

ウ 若い世代に新しい生活を望むのは、偶像崇拝と変わらないのではないかということ。

エ 私が望むものより閏土が望むもののほうがすぐに手に入るので、笑うのはおかしいということ。

(3) ――線③「地上の道のようなものである」とあるが、これはどういうことを表しているか。最も適当なものを選びなさい。〔　〕

ア もともと地上には道がないように、実際には存在しないものだということ。

イ 同じ願いのもとに進む人が増えれば、確かなものになるのだということ。

ウ 具体的な道筋を示さなければ、行動する人は増えないのだということ。